高知県本山町と大阪市西区の歴史のつながり

『白髪山（しらがやま）のお材木』

高知県本山町地域学習副読本

図1　吉野川を使った木材の運搬

400年ほど前の江戸時代のはじめ，大坂（今の大阪）は一度の合戦で焼け野原になったため，復興のために大量の木材が必要でした。土佐藩（今の高知県）は，幕府からのあいつぐ命令で，大坂城を建てる土木工事のお手伝いにかり出されました。命令のたびに多くの人手や資金がかかるため，土佐藩はお金のやりくりに困り，京都の商人から借金を積み重ねるほどでした。そこで，土佐藩の政治を担っていた野中直継（のなかなおつぐ）は，幕府から土木工事のお手伝いの代わりに，木材を差し出す許しをえました。そして，多くの農民を使って本山町の北部にある白髪山周辺の材木を切り出す施策に乗り出しました。

江戸時代より前にも，白髪山のヒノキ柱や帆を張るための柱は，天下をおさめた豊臣家に差し上げられるほどの名産でした。切り出した木々は，吉野川を使って阿波（今の徳島県）の下流の鳴門方面まで流されたあと，船で大坂に出されました（図1）。また，野中直継は大坂に蔵屋敷を建てて，材木を売って利益を上げようとしました。こうして日本で最初の木材市場が大坂に開かれました。野中直継は３年で借金を返しただけでなく，土佐藩の重要な収入源にしました。この功績が認められて，直継には土佐をおさめていた山内家から嶺北（高知県北部の吉野川上流の地域）一円が与えられました。

市場を開いてから，各地から木材が入ってくるようになりましたが，土佐からの材木がほとんどで「お材木」と特別によばれるほどでした。また，土佐材木は一番にせりにかけられるうえに，割引をせずに取引されるなど，その質のよさから特別な待遇を受けました。

白髪山の名前をとって，最初に市場が開かれた場所は，白髪町とよばれました（図2）。ここは東西に運河が開かれ，海からの入り口にあたるために物資を運ぶのに便利でした。町を横切る長堀川にかかる橋の一つは，白髪橋とよばれました。川は戦後埋

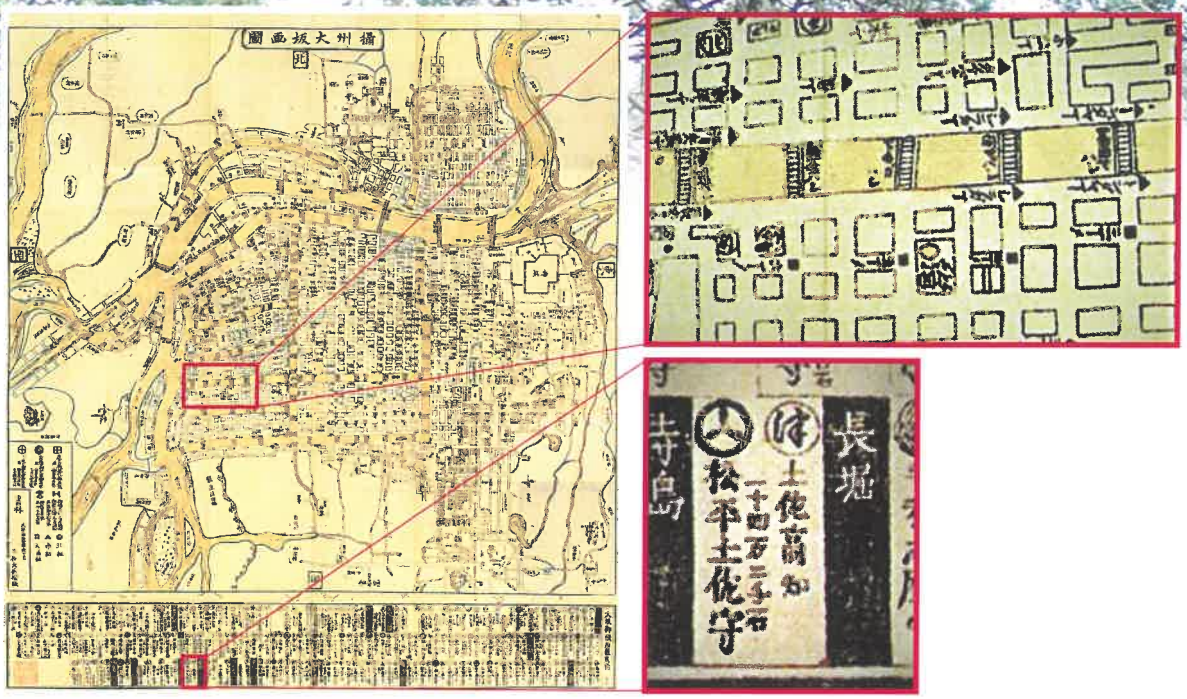

図2　摂州大坂画図（大阪古地図集成 第7図）（大阪市立図書館デジタルアーカイブ）

め立てられて道路になりましたが，今でも橋のあった交差点にその名前が残っています（写真1）。交差点のそばには，「大阪木材市売市場発祥の地」とかかれた石碑が建っています（写真2）。材木のほかにも土佐の名産鰹節（かつおぶし）を取引する鰹座（かつおざ）があり，たくさんの問屋が並んでいました。また，蔵屋敷の中に，土地をまもるために土佐藩があつく信じた土佐稲荷神社（とさいなり）がまつられました。土佐藩の施設は，明治に入って，三菱をつくった岩崎弥太郎（いわさきやたろう）にひきつがれました。神社を含む土佐公園には，たくさんの桜が植えられ，桜の名所になりました。戦前の手まり唄「知ったお方は白髪橋，知らんお方は問屋橋（といやばし），とんだお方は富田橋（とんだばし），今日は稲荷か，阿弥陀池（あみだいけ）」にあるように，土佐稲荷神社は子どもたちの遊び場所の一つでした。

写真1　白髪橋

写真2　大阪木材市売市場発祥の地

写真3　白髪山のヒノキ

このように，400年前から本山町と大阪市西区には，木材を通した深いつながりがありました。

野中兼山（けんざん）（野中直継の養子）が政治を担うようになって，吉野川沿い，特に白髪山の質のよい土佐材木が幕府に差し上げられる材木として多く切り出されたようです（写真3）。その一方で，山林をまもるためにスギやヒノキなどの木を植えるようすすめたり，「とめ山制」をしいて農民が自由に木を切ることを禁じたりしました。白髪山はとめ山の中で最もすぐれた「土佐の十宝山」の一つとしてたたえられ，見張り番（山役人）がおかれました。その代わり，農民は紙の原料となるこうぞや，茶，うるしといった特産品をつくるようすすめられました。本山は，山間地で平地が少なく，わずかな水田があるだけでした。そこで兼山は，用水路をつくり，あれた土地を田や畑に変えて土佐藩への年貢をふやそうとしました。このとき本山につくられた4つの用水路は今でも町の人々の役に立っています。しかし，農民は大変な用水路工事にかり出されたうえ，水田が増えても自分たちの米の取り分が多くなるわけではなく，まずしい生活をしいられました。この厳しいやり方は，のちに兼山が地位を失うきっかけにもなりました。

吉野川の上流から木材を流すと，阿波藩（今の徳島県）を横切ることになります。はじめのうち，阿波の役人は，木材のどろぼうを取り締まることに協力しました。しかし，夏に水かさが増した時に，木材が堤防を壊して田畑に大きな被害を出しました。これに吉野川ぞいの人々は不満をつのらせ，阿波の都合で木材を流すことを止めることもありました。こうした土佐藩と阿波藩の対立は，江戸時代の終わりごろまで続きました。

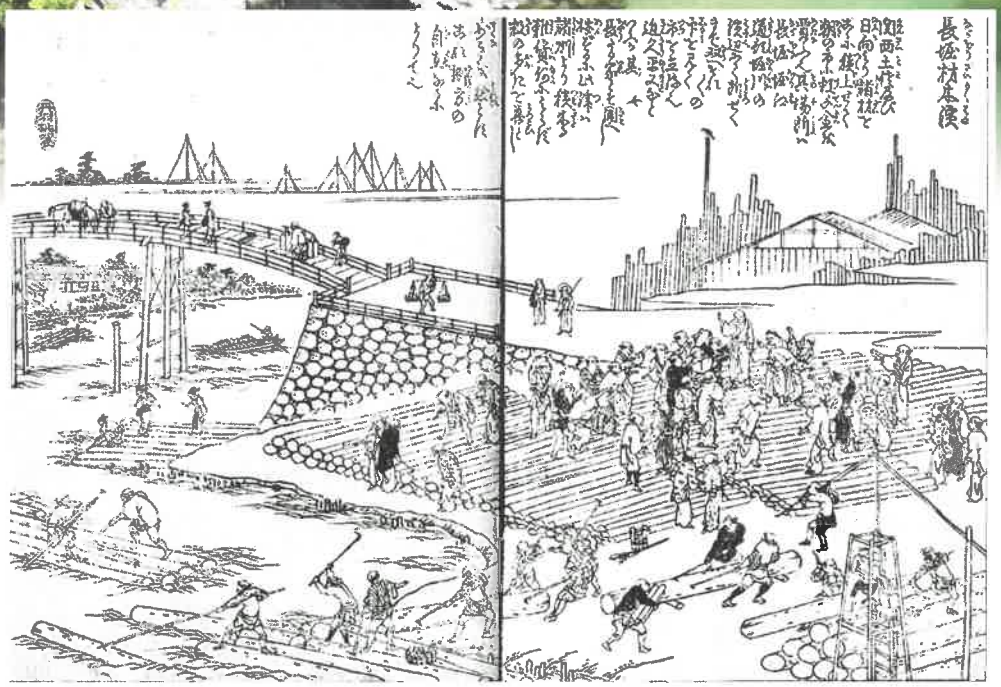

図3-1　摂津名所図会（大阪市立図書館デジタルアーカイブ）

大阪木材市場が長らく繁栄していたことは、そのころの観光案内書が伝えています（図3）。戦前（1940年頃）まで，川筋には材木屋が軒を連ねていたことが読み取れます（図4）。ほかに家具屋が並んでいる通り（たちばな通り）がありますが，船を修理したり，貴重品を入れるための船ダンスをつくったりする大工が集まっていたといいます。戦後（の高度成長期とりわけ1970年頃）は「家具のまち」として全国に知られるようになりました。現在は，「オレンジストリート」とよばれ，大阪のおしゃれを代表する通りになっています。このような土佐材木と大阪の発展の歴史を考えると，白髪山のヒノキは長きにわたって大坂の町を支えた，かげの立役者といってもいいかもしれません。

図3-2　浪華百景「長堀財木市」
（大阪市立図書館デジタルアーカイブ）

木材の流通によって生まれた，本山町と大阪市西区との深いゆかりを生かして，交流が進んでいます。本山町は吉野川の流れと，山林の深い緑に囲まれた自然豊かな地域ですが，人口が減り続けています。一方、大阪市西区は市の中心部に位置し、

図4　1940年の大阪堀江の土地利用「なにわ堀江1500」

交通の利便性が高く、都心回帰・マンション建設が進む中で子育て世代の人口増加が進んでいます。これらは真逆の環境にありますが，連携すればお互いの強みを生かすことができるかもしれません。そこで，白髪山のふもとにある，「本山町汗見川活性化推進委員会」は，大阪市西区の「にし恋マルシェ実行委員会」等と協力して交流を深め，イベントに出店するなど，お互いのまちづくりに生かそうとする取り組みが始まっています（写真4）。

地域の歴史をひもとくことは，先人たちのたゆまぬ努力によって，今ある地域がどのようにつくられてきたかを理解することにつながります。それは次の世代に何を受け継いでいくかを考えることにもつながるでしょう。ぜひ皆さんも，ゆかりのある地域の歴史のつながりについて，考えてみてはどうでしょう。

写真4　力自慢で盛り上がった丸太切りコンテスト
「高知新聞2018年9月23日」

【発行】高知県本山町　令和3年3月
【監修】中村　努（流通経済大学）【協力】梶　英樹（高知大学次世代地域創造センター）